

フランス リール政治学院

留学体験記

静岡県立大学 国際関係学部国際言語文化学科 4 年

フランスのリールにある Sciences Po Lille での留学生活は、毎日が新しい発見の連続だった。授業で知識を得ることはもちろん大事だったが、それ以上に、日々の暮らしの中で感じたこと、見たこと、経験したことが、今振り返っても印象に残っている。最初は言葉も不安、文化もわからないが、そんな中に飛び込んだからこそ、得られたものは大きかったと思う。

Sciences Po Lille は、政治や経済、歴史など社会科学に特化した学校で、授業の内容はとても幅広く、どれも本格的だった。自分の興味に合わせて授業を自由に組み合わせることができ、国際関係、ヨーロッパ政治、現代経済、ジェンダー論など、多様なテーマに触れることができた。授業はただ聞くだけでなく、ディスカッションやグループワーク、プレゼンなどが多く、学生の参加が求められる。学生同士の関係もとても刺激的だった。多くの学生が政治や社会問題に関心を持っていて、遊んでいる時やカフェでの会話が、自然に真面目なテーマになることもよくあった。最初についていくだけで精一杯だったが、少しずつ言っていることがわかるようになり、自分も意見を言えるようになると、会話そのものがモチベーションになった。日本について聞かれることも多く、「どうして政治について話さないの?」とか、「日本の大学ではデモをしないのか?」といった質問から話が広がることもあった。

学校にはたくさんの学生団体があり、その中でも BDI という留学生サポート団体の存在がとてもありがたかった。BDI のメンバーは、ウェルカムイベントや市内ツアー、料理パーティーなどを企画してくれて、他の留学生や現地の学生と自然に交流するきっかけをつくってくれた。こうしたイベントがあったおかげで、友達もできたし、学校生活にすぐ慣れることができた。春セメスターから、Taishan というアジアに興味を持つ学生が集まる団体に入った。日本に来たことがある、又は今後留学する予定の学生と交流することができ、日本の文化や伝統、政治などの情報をフランス語で発信できる場所で楽しかった。そのため、自然と日本のニュースに関心を持ち、日本にいるとき以上に日本の政治等に関する記事などを読むようになった。自分の国を外から見つめなおす機会でもあった。

住まいは、CROUS という公的な学生寮だった。部屋にはベッドや机、収納など必要なものがそろっていて、シンプルだけど暮らしやすかった。値段的や施設の充実度的に、現地の学生間でも人気が高いため、部屋はほとんど埋まっている。一方共有スペースがないため、住民同士の交流はほとんどない。自炊が基本だったので、食費は月に 150~200 ユーロほどだった。

生活面で一番苦労したのは、やはり言葉だった。買い物や手続きなど全部フランス語で

行わなければならない。聞き返されたり、うまく通じなかったりしたが、そういう経験を繰り返すうちに、完璧でなくても伝わるという感覚が身についてきた。大事なのは、黙らないこと、あきらめないことだと気づいた。

学業の合間には、旅行もたくさんした。リールはベルギーとの国境に近く、パリやブリュッセル、アムステルダムなどにもバスで数時間で行ける。週末やバカンスの時期を利用して、フランス国内やヨーロッパの都市を巡った。どの街にもそれぞれの魅力があり、建物や人の雰囲気、食文化など、移動するだけで新しい世界に出会える感じがあった。教科書で学んだことが、実際の街や人々を通してリアルに感じられる瞬間が、何度もあった。

この留學生活の中で最も重要だったのは、人との出会いだった。勇気を出して話しかける、イベントに参加してみる、そんな小さな一歩を積み重ねることでたくさんの人と出会い、助けてもらった。みんな本当に親切で、生活面、勉強面で困っていると助けてくれたり、色々な経験をさせてくれたりした。リールでの留學生活で、日本とは違う暮らしぶり、価値観に触れる中で、自分がどんなことに興味があって、どんなことを大事にしたいのか、少しずつ見えてきたと思う。



交換留学報告書

～リール政治学院～

2024年9月～2025年3月

国際関係学部 国際言語文化学科 4年

初めに

私は大学三年生の後期から四年生の前期までの一年間、本校の交換留学プログラムを利用してフランスのリール政治学院へ留学しました。リール政治学院はパリを含めたフランス各地に学校を持つ大規模な私立大学です。優秀な学生が多く、フランス国内ではかなりの知名度を誇ります。今回滞在したリールという町は、フランスで二番目の大きさを誇る大都市です。フランス北端で、ベルギー国境付近にあります。大学が一番栄えている中心地にあり、ショッピングや外出先としても多種多様な選択肢があります。また同じく中心地に、TGV(日本で言う新幹線)や国内外高速バスのターミナル駅、空港もあるため国内外への交通の便が非常に良いのが特徴です。

学校生活

留学先が政治学を専門とする大学でしたので、当然ですが政治に関心がある学生が多く、講義では各々の国の外交や安全保障政策などを持ち出し比較し意見交換をする機会も多くありました。また学生を主体とするデモ活動も多くありました。このような活動が身近にあるという環境は私にとってとても新鮮で、自国の政治、社会に対するフランス国民としての強い自覚を日々感じました。

部活動としてバトミントン部に所属していました。現地学生が多く、フランス語での会話でしたが勝敗で共に一喜一憂するなど、「スポーツは世界を繋ぐ!」を体感することができました。

その他にも様々な学生団体があり、毎月何かしらの団体が校内イベントを開催していました。台湾人の友人とアジアに関心のある学生が主催する書道の講習会に参加してみたりもしました。自分たちの地域の文化に興味を持ってくれている学生たちとの交流は新鮮で不思議なものでした。

言語

私はどうしてもフランス語を上達させたかったため、お店や病院、道を尋ねる時など、どんな状況でも極力フランス語を使いました。現地学生向けの授業を聴講させてもらったり、フランスの子供番組を見たり、フランス人の友達を積極的に遊びに誘ったりするなど自分でフランス語に触れる機会を作りました。毎学期初めには現地学生と留学生のパートナーを作るイベントが開催されます。国際交流に興味のある学生が多く参加するため、自分のパートナー以外にも沢山の新しい交流が生まれます。私も実際に参加して、フランス人の友人を作ることに成功しました。留学生と現地学生との授業は基本的には区別されているため、学内での交流はかなりハードルが高い印象です。そのため、このような制度やイベントを利用して積極的に交流する機会を作ることをお勧めします。

もちろん文法は間違いだらけで通じないこともありますし、ネイティブの高速のフラン

ス語はほとんど聞き取れません。しかし残念ながらフランスに居たとしても、自分から行動しなければフランス語を使う機会は少ないのが現実です。会話が理解できない、理解してもらえないという状況はかなりストレスでしたが、いざとなれば英語を使えば良いという感覚で挑戦し続けました。学んでいる言語をいつでも日常に落とし込むことができる環境で生活できるのが、留学の最大の強みだと思います。

日常生活

リールはベルギー国境付近に位置しているため、食べ物や建物など近隣諸国との文化の交わりが見られます。また植民地時代の影響でアフリカ系やアラビア系の移民が多く、多種多様な民族が暮らしています。世界有数の多民族国家での生活は非常に刺激的なものでした。自国の文化に対する誇りと強い愛国心は、多様な文化が混ざり合う中で独自の色彩を保ち続ける強い意志を感じさせます。西洋のジェンダーやヴィーガンなどの問題に対する敏感さも強く感じられました。フランスないしヨーロッパが抱えている問題と課題に対し国民がそれらとどう向き合っているのか、その一部を間近で見て、聞いて、考えるという貴重な経験をすることができました。

フランスでは時間帯に関係なくテラスでビールを飲みながら談笑する光景をよく目にします。お喋り好きで休息はしっかり取るフランスらしい光景です。フランスの芸術文化に感化され水彩画に挑戦したりもしました。週末の朝に開かれるマルシェで部屋に飾るお花を買い、籠いっぱいに苺を買って帰るのはまさに我々が想像するフランス人の日常です。フランスの国民的ヒーローのジャンヌダルク祭にも参加しました。ホームパーティーや、クレープパーティーに参加したりもしました。留学後半にはピクニックにはまり、放課後や晴れた日など暇があれば果物やワインを持参して公園で雑談する日々を送っていました。座ってただ雑談をしたり、ピクニックをしたり、読書をしたり、今そこに居る人と今この瞬間を楽しむ素敵な文化です。沢山のフランス文化を全身で体感した一年でした。日本に居た頃よりも自由時間が多かったため、新しいこと、やってみたいことに挑戦する機会が沢山あり、自分と向き合う時間も自然と増えていきました。

旅行

フランスでは各学期に一週間の休暇が二回あるため、その休暇や、授業が無い日を利用して旅行していました。ヨーロッパ、アフリカ、中東諸国の計 19 か国を巡りました。その他にも、フランス国内や近隣諸国には何度も訪れているためかなり沢山の場所を訪れたと自負しています。同じヨーロッパでも、国によって少しずつ国民性や、町の雰囲気がいちいち異なり多様な人種国家の中でも自国の色を保っているのが見受けられました。その一方で、国

境付近にある地域では国同士の文化や言語が混ざり合った特異性を感じたりもしました。アフリカの文化はアジア、ヨーロッパとは全く異なったもので、一分一秒が新発見新感覚の連続でした。一部の国では植民地時代の名残でフランス語を話す所もあるため、フランス語を使う機会も多々ありました。

画面越しに見ていた景色や文化に直で触れた感動は今でも鮮明に思い出せます。教科書で習った歴史的史跡を訪れ、現地の人の視点から観察すると異なる見え方があることに気づきます。それは同様に外側から見た日本の姿を知るきっかけにもなりました。随時変わる現状やハプニングに、柔軟に対応しなければいけない機会も多々あり、精神的な面での成長も感じられました。

終わりに

留学に興味や憧れはあるけれど、あと一步が踏み出せない。明確な目的がなければ行く意味がないのではないか。そんな風に考えている学生もいるのではないのでしょうか。交換留学という恵まれた環境で、フランスに1年間も滞在することができるなんて、こんな素晴らしい機会を逃したくない。本場のフランスパンをフランス語で注文して食べてみたい。これが、私が留学を決意した本当の理由です。現地の人や文化に触れることでフランスという国に対する理解を深めると同時に、異文化共生や政治的、社会的問題など、行く前は想像できなかった実際に住んでみたらこそ分かることが沢山ありました。躊躇していたけど行ってみたら楽しかった、やってみたら意外と出来た、その逆で実際には思っていたのと違っていたという経験も沢山あり、理由はどうぞであれまずは行動してみる、挑戦してみることの大切さを学びました。

また様々な人との交流を通して、彼らの自分の興味のある分野と自国に対しての知識と理解度が高く、それに対する説明や意見を言語化する能力が非常に高いと感じました。私自身これまでの人生を通して様々な事象に触れてきたつもりでしたが、それはただ経験しただけで終わってしまっていたことを痛感させられました。常に自分の意見や感想が問われる状況下において、論理的思考力も培われたように感じます。

この一年間で得た経験、出会いを大切に今後も精進していきます。